

ええじやないかの心意気

天下御免の大和田宿

八千代市を東西に走る国道296号、通称「成田街道」は、江戸幕府の公式文書では「佐倉道」と呼ばれ、江戸と佐倉を結ぶ街道でした。江戸時代後期に成田山参詣が盛んになり、成田街道と言う愛称が付けられました。

交通網の整備には、時の権力者による統治という背景があり、江戸幕府も戦国時代の伝馬制度を拡充した宿駅制度により支配を行います。街道の重要度により、道中奉行の監督する五街道（東海道、中山道、甲州道中、日光道中、奥州道中）と、それに付属する諸街道は勘定奉行の取扱いとなりました。

東海道五十三次を題材とした浮世絵に、当時の宿場の情景があります。「宿」という呼称は、道中奉行の支配下にある五街道の駅を指すものでした。ところが市域に伝えられた寛文元年（1661年）の日付がある文書の中に「大和田宿」という文字が残されています。

この文書は勘定奉行から出されたもので、大和田駅が幕府の御用に対し、人馬の提供を行うことになり、不足分を近隣の五力村（宇那谷、花島、坪井、大神保、桑橋）に協力要請（助郷）しますが、五力村がこれに応じなかつたので訴訟となりました。

「八千代の歴史と文化」のこしたいたいもの ⑫ 監修 小林 弘治
つたえたいもの 絵 小出 忠美

これに対する判決文の中に「大和田宿」という文字が記されていました。勘定奉行からの公式文書ですから、佐倉道における唯一の「宿」という格付けがなされた、ということになるわけです。

天保7年（1836年）に五街道に付属する脇街道と、水戸佐倉道が道中奉行の支配下に組み入れられますので、寛文元年の文書は、175年もの以前から宿と認めさせた大和田宿の人の心意気さえ感じずにはいられません。

発端となった助郷制度は、交通量の増大とともに人馬役負担増となり、宿駅と助郷との間の紛争を生む矛盾を含むものでした。経済の発展は貧富の差を生み、庶民の不満は募るばかりです。この様な時代に入々は信仰に名を借りた旅行に出て、解放感を得るようになります。伊勢参りや霊山登山、そして下総成田山参詣がこれにあたります。

権力者が整備した街道を庶民が活用したのです。

えび川の宿のはすれのしむぶさくの

左は大和田 三里半

十返舎一九

